

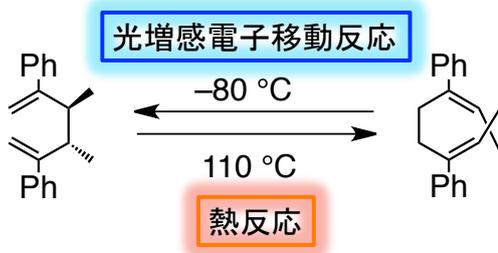


第 25 回記念 万有仙台シンポジウムに寄せて

大阪府立大学 池田 浩

万有仙台シンポジウムが今年、25 回目を迎えられたとのこと、おめでとうございます。私は、シンポジウムが始まった 1990 年の 3 月に東北大学大学院理学研究科で学位を取得し、10 月には当時の教養部化学科の助手として研究を開始しました。したがって、シンポジウムと同じく私も大学教員として 25 年目を迎え、万感の思いがあります。

当時、私は光増感電子移動反応を用いて、様々な有機化学反応を誘起する研究を行っていました。今でいう、「光レドックス触媒」、「SOMO 活性化」です。例えば、本来は熱反応である 2,5-ジフェニル-1,5-ヘキサジエンの Cope 転位は、この光増感電子移動反応でも誘起でき、しかも熱反応とは全く逆方向に反応を進行させることができます (図参照)。1993 年の本シンポジウムでもこれを紹介しましたが、当時の有機合成化学者が光反応や電子移動反応に馴染みがない中で、「光を使って電子を移動させる」、「中性分子をラジカルイオンに変換して活性化させる」という新概念がなかなか理解して頂けず、苦労した覚えがあります。しかし、その後は我々の反応に興味をもつ有機合成化学者が国内外に現れ、現在に至ります。長い年月が掛かりましたが、自分たちが基礎を築いた研究が、有機合成の重要な手法の一つとして発展したことについては、誇らしく思います。



さて、仙台は学術研究をするにふさわしい都市の一つです。都会の喧噪を離れ、自然環境にも恵まれ、アメリカの学園都市を彷彿させます。残念な点があるとすれば、関東地区、関西地区に比べると、講習会等に気軽に参加できないことでしょうか。その点、この万有仙台シンポジウムは、仙台に居ながらにして有機合成の著名な先生の講演をまとめて拝聴できる、貴重な機会を与えています。また、有機合成だけではなく、時には有機化学全般を広く俯瞰する講演もあり、楽しみの一つでもありました。万有仙台シンポジウムは、東北の学生に様々な有機化学分野の未来を占う場を与えている、と言ってもよいでしょう。

学生の皆さん、有機合成はスタートで、ゴールではありません。有機合成をした後、何をするかかが問われます。しかし、有機合成ができないとスタート地点にすら立てません。だからこそ有機合成が重要なのです。今後、万有シンポジウムがさらに発展し、東北をはじめ日本各地の学生が、このシンポジウムに参加することで有機合成をさらに学び、世界に羽ばたくことを大いに期待します。